

Annual Report 2022.4 - 2023.3

地域の「しあわせ」を考え・行動する

顔の見える関係づくりから
はじまる、はじめる

目指す社会像
Vision

身近な暮らしの中で幸せを感じ、
共に生きる社会

私たちの考える役割
Mission

「あいだの人になる」

行動指針
Stance

「対話」×「創意工夫」×「行動」

CONTENTS

2 主な1年間の動き 2022.4-2023.3	12 社会福祉法人コンサルテーション	19 横浜市社会福祉職階層別研修 横浜市里親養成研修
3 困難な時代をより良く生きる	13 キャンディブーケ ～障害児・者の保護者の交流の場～	20 福祉サービス第三者評価
4 ごあいさつ 理事長・センター長	14 子ども・若者の育ちと自立を支えるセミナー 2023	22 2022年度会計報告
6 10周年記念 感謝会	16 横浜市ヤングケアラーフォーラム	23 団体概要
8 困難を抱え孤立する子ども・若者の社会的 自立支援事業	18 横浜市地域包括支援センター職員研修	
10 共に生きる社会づくりのためのオンライン講座		

2022.4 - 2023.3

主な一年間の動き

10周年記念 感謝会 開催

P6.7



よこはま地域福祉研究センターは、設立10周年を迎えることができました。10月8日(土)感謝会を開催。共に歩んでくださった皆さまが会場に集ってくださいました。発足から、今日までの歩みに耳を傾けて頂き、後半は、活発な対話の時間となりこれからの研究センターに、期待と励ましのメッセージを頂きました。

**共に生きる社会づくりのための
オンライン講座 Part2**

P10.11



昨年度に引き続き、「ガチガチをゆるゆるに！弱さを大胆に！不安を可能性に！」障害児者の地域での自立生活を目指し、今年度は「ライフステージ」にフォーカスして当事者・家族・多様な専門職の方々、8回のオンライン講座を開催。今年も全体アドバイザーは、全国手をつなぐ育成会の又村あおい氏。今年もたくさんの豊かな出会いと、ワクワクの対話が実現しました。

**育ちづらい？生きづらい？
子ども・若者の声に耳を澄まそう**

P14.15



全4回。子ども・若者の声に耳を澄まし、共に生きようとする皆さんが集結しました。子どもや若者の今を知り、孤立を防止し、未来に夢と希望を持って育ち、生きるために何が必要なのか学び、考える場となりました。このつながりは次年度、更に広がる子どもプロジェクトによる事業に活けると確信しています。

人材育成・啓発等、委託事業

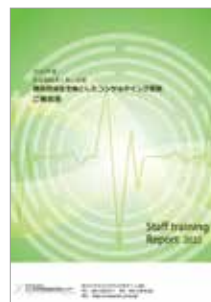
P16-19



地域包括支援センター職員研修・里親養成研修、自治体の福祉職研修など、人材育成関係の委託事業を複数担いました。また、今年度は、ヤングケアラーに関する啓発を目的としたフォーラムの企画・実施も行いました。どの事業も、受講者・参加者と共に学び、福祉社会構築のためにより良いプログラム開発に努めています。

社会福祉法人コンサルティング事業

P12.13



複数年継続して障害児者を対象に福祉事業を行う社会福祉法人について、職員育成を主軸としたコンサルティング事業を行っています。異なる地域に個性ある法人が、地域とつながり、利用者の利益と職員のやりがいを大切にしながら、より求められる福祉サービスの提供を目指すプロセスに伴走しています。

福祉サービス第三者評価事業

P20.21



新型コロナ感染症拡大の中、大きな影響を受けた福祉事業所ですが、今年度も、沢山のオファーを頂き、併せて33事業所の福祉サービス第三者評価事業を行いました。調査員の皆さんと事務局のチームワークを大切に、福祉サービスをエンパワする評価事業となるよう取り組んでいます。

PHILOSOPHY
困難な時代をより良く生きる

「わたしへの思いやり」ーセルフケアのススメー



「しあわせの実現のために、誰もが可能性を追求してやまない、柔らかな心と勇気に溢れる社会」よこはま地域福祉研究センターが目指す社会像です。

人口減少や超高齢社会の到来等、私たちの暮らしの今、未来に影響を与える課題に直面する中、新型コロナウイルスの感染拡大が社会全体を震撼させ、市民生活に一層、負の影響を及ぼしました。この状況は、多くの人々の複雑多様な「生きづらさ」を招くことになりました。

生活保障実現のための要素として、よく使われる表現に「公助・共助・互助・自助」があります。

「公助」は、税金による負担で生活保護や社会福祉の制度を指し、「共助」は、介護保険や医療保険等、リスクを共有する被保険者の間で負担されます。「互助」は、費用負担が制度に裏付けられていない自発的なもので、地域住民・ボランティアによる支援提供です。そして、昨今、最も重要で、その力が高まるのが期待されているのが「自助」です。「自助努力」と言い換えた方が伝わりやすいでしょうか。自らを自らで助けるチカラが生活保障のために必要とされています。

「自助努力」と言われて、何をどうすれば？という疑問が湧きませんか？それなら、自分自身を適切に捉え、生きづらさに陥らないよう予防する「セルフケア」と考えてみてはどうでしょうか？

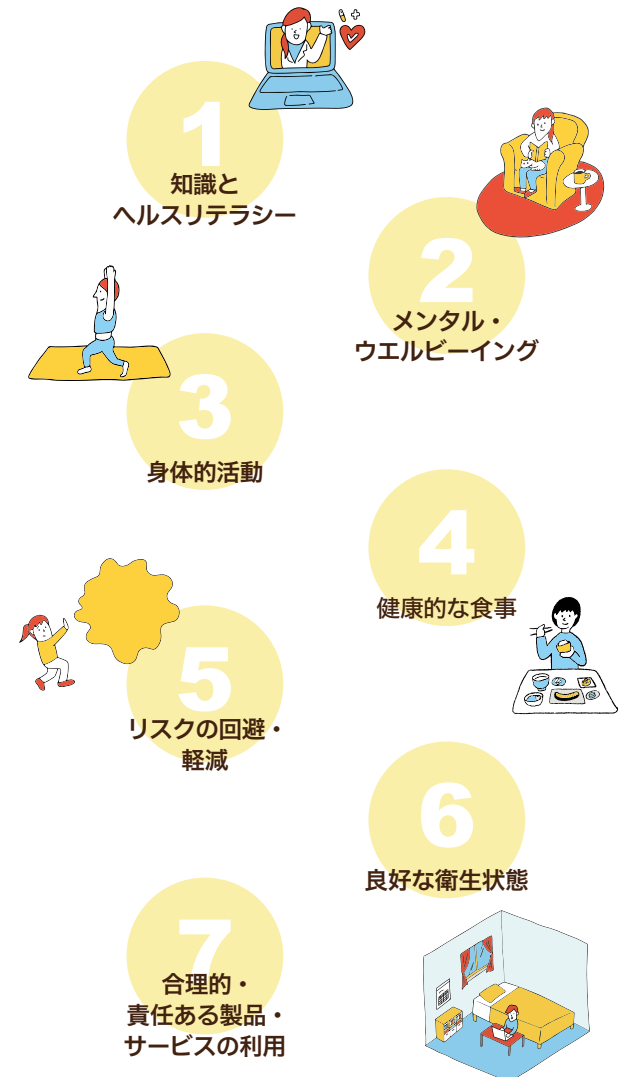
「セルフケア」の概念として構成する7つの柱を右図で紹介しました。さて、この7つ、あなたは、生活の中で意識して実践できていますか？「私への思いやり」を持って点検してみることが大切です。

困難が渦巻く社会においても、より良く生きる。未来に希望を持つことを諦めることはできません。生きる・暮らすの主人公は、私たちひとり一人です。

よこはま地域福祉研究センターは、人と地域のしあわせのため、「自助力」「セルフケア」についても、皆さんと考え、私たちが地域社会で豊かに生き抜けるよう取り組んでいきたいと思っています。

(引用：国際セルフケア財団資料)

セルフケアの7つの柱





Munehiro Toyoda

理事長 豊田 宗裕

2012年に活動を開始した当センターが、10周年を迎えることができ、次の時代の新たな活動に向けて発進を始めました。設立時より、人と人、人と組織、人と環境のあいだに立ち、「あいだの人」として、人々が、幸せに暮らす社会を求め事業を行ってきました。職員一同、これからも積極的に事業展開を進める所存であります。

改めてこれまでの実践を振り返ると、この10年で事業の領域や内容が大きく広がり、それに伴って、新たな組織や機関との連携・協働の必要性を実感することになりました。

私たちが、主として事業の範囲としてきた「地域福祉」の分野は、ここ数年の動きを見てもその対象領域が広がり、複雑・多様化の様相を呈しています。求められる課題解決の視野・視点が多岐にわたり、多様な現場の情報収集と分析、更に、地域福祉にかかわる市民・専門職等の意見の聴取、更には、連携・協働による課題解決が必須となっています。

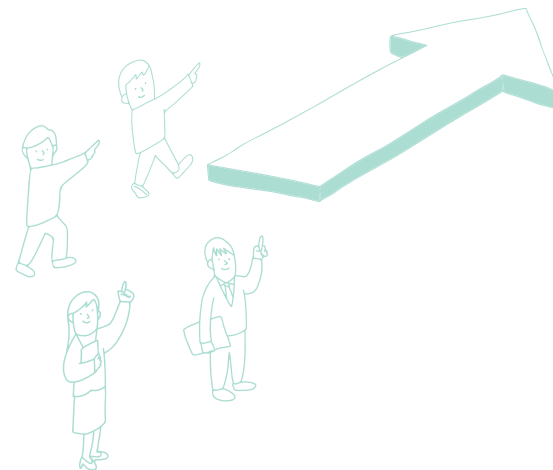
こうした状況に対応していくためにも、当センター職員は、多様な福祉分野に横断的な関心を持ち、外部の福祉実践者とも積極的にコミュニケーションを図り、継続的で、成長する事業展開を目指して取り組むことに努めています。

設立時より、当センターが大切にしている「対話」は、私たちの組織が、より広範な研究活動の視野や認識に気づき、知見を確実にしていくためにも必要不可欠です。近年増えている委託・協働事業における課題解決に向けての提案も、日常的な、職員のこうした努力によって、築いてきた形ではないかと考えております。

当センターは、多くの人や機関、団体の方々に出会いました支えられ、活動実践を通じてたくさん関係を創ることができました。

これまでと変わらぬ姿勢と新たな挑戦の双方を大切に、われわれ「よこはま地域福祉研究センター」は、多くの人々に求められる法人としての事業展開を、また、「あいだの人（中間支援組織）」としての役割を果たすべく、次の10年に向けて更に歩みを続けていきたいと考えております。

引き続きのご指導を、よろしくお願いいたします。



PROFILE

1960年生まれ。明治学院大学大学院修了後、1985年社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会入職。その後、日本総合研究所、横浜国際福祉専門学校、星槎大学等を経て、現在、聖徳大学心理・福祉学部社会福祉学科教授として教鞭につく。専門は地域福祉、コミュニティワーク、福祉行政論など。神奈川県共同委員会評議員／茅ヶ崎市総合計画審議会委員／横浜市社協ウィング研修委員会委員／神奈川県、栄区地域福祉計画推進委員会委員

次の10年に歩みを進めるにあたり



Reiko Satsuka

センター長・副理事長 佐塚 玲子

様々な方々のご支援により、設立10周年を迎えることができました。

感謝会には、沢山の方が駆けつけてくださり、いらっしやれなかった方々からも沢山の励ましのメッセージを頂きました。本当にありがとうございました。「人と地域のシアワセの実現」を、私たちの変わらぬミッションとして、11年目に歩みを進めたいと思います。

過去3年間、新型コロナウイルス感染防止のため、人との接触が不要不急の範疇になりました。仕事の現場でも、リモートワークや、SNSを活用した会議や研修などが行われ、効率的、合理的な働き方として、コロナ収束後も定着すると思われます。

一方、人々が守り通したマスク生活、多様な対面の集いの禁止、黙食の推奨等々、私たちの暮らしに様々な規制が入ったことによる負の影響が気になります。

センターの仕事を通して感じるのは、「孤独・孤立」の広がりです。社会構造の変化とともに、じわじわと「問題」として顕在化するようになった「孤独・孤立」が、特別な誰かだけでなくとも、陥りやすく、抜け出しにくくなっています。

物質的に豊かになった社会で、私たちは、個人で様々なものを持てるようになり、いつしか個人の選択と決定が重視される社会になりました。こうした風潮は、人間関係にも及び、誰と付き合う、付き合わない等が、個人に委ねられ、嫌な関係、息苦しいつながりから離れる自由を持つようになりました。この現象は、子どもから高齢者、誰にも当てはまり、家族単位でも、煩わしい親族や近所の人間関係から逃れる選択が広がります。コロナ禍のマスク生活・黙食や対面の集いの禁止なども、場合によっては、煩わしさを避け、他者から自分を閉ざした暮らしを容易にした一面があったかもしれません。そして、こうした暮らしの結果、多様な人間関係の広がりや深まりの喪失、他者と共に重ねる生活経験の薄さが、負の影響をもたらすはじめ、人々の生きづらさへとつながっているように感じます。

今、改めて「対話＝話す×聴く」を大切に考えていきたいと思っています。人と人の中には、時に、理解しにくいことや、対立さえも起こります。それでも「想像力」を働かせて話し聴くことによって、共感や新たな発想を生み出すと信じています。

今年度、10周年感謝会をはじめ、新たな出会いを実現し、想いを語り合い、聴き合う場をいくつも創ることができました。本誌でも、それらの事業をご紹介させていただきますが、集う方々の個性や人間力によって豊かな時と場となり、「人は人と関わってこそ人」そして地域社会は「人が関わりあうことで生まれる」ことを改めて体感しました。

脱孤独・脱孤立！私たちの一番の財産である人や組織とのネットワークを大切に、生きる喜びと勇気が沸き立つ人と地域を目指して、取り組みを続けて行きます。

PROFILE

慶応義塾大学卒 神奈川県立保健福祉大学大学院修了
横浜市地域ケアプラザ職員、認定NPO法人市民セクターよこはまの勤務経験から、地域福祉への関心を深める。2012年特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センターを故 泉一弘氏と設立。以来、センター長と副理事長を兼任。相模女子大学、横浜YMCA 学院講師、神奈川県社会福祉審議会委員、神奈川県地域福祉支援計画評価・推進等委員

脱孤独・脱孤立！出会って対話して、みんなが掴むシアワセ



10周年を迎えることができました！
見守ってくださりありがとうございます。一緒に歩んでくださってありがとうございます。
これからもよろしくお願いします！



2012年10月1日、NPO法人として認証をうけ、2013年4月1日、それまで在籍したNPO法人から分離独立して事業をスタートしました。

JR 関内駅から徒歩5分。ベ이스ターズ通りの昭和30年代のレトロなビルの2階。1階はお花屋さん、2階のお隣は社労士事務所。3方向窓の明るい事務所の外にはアオダモの木。春の日差しを受けて若葉が輝いていました。確かな将来の見通しなどないところからの出発でしたが、経営に関しては全面的にバックアップしてくださった初代理事長の泉一弘の支えもあって、前だけを向いて、歩き出しました。

「人と地域のしあわせの実現」のために、チャレンジ！調査研究、対象や分野を限定しない様々な事業、必死で取り組む日々。それでも、10年後に、こんな感謝の会を開くことができるとは、想像すらできませんでした。私たちの周りに、こんなに見守り、支え、

共に歩んでくださる皆さんがいることを改めて実感できた幸せな一日になりました。

60名を超える会場に足を運んでくださった方々、当日、会場にいらっしやることができなくても、メッセージをくださった方々。本当に嬉しかったです。

IIHOEの川北秀人先生、基調講演ありがとうございます。皆さんで、語り合った、ワールドカフェ、色とりどりの、コメントに更に励まされました。

私たちは、既に、次の10年に向けて、一步を踏み出しています。様々な「生きづらさ」が広がる時代、「人と地域のしあわせの実現」は、容易には実現できないことを知っています。でも、心を開き対話するとき、共感するとき、悲しみを喜びを分かち合うとき誰もが「しあわせ」を感じ、生きるチカラが得られることを知っています。どうぞこれからの5年、10年、よろしくお願いいたします。



鈴木 裕司さん 大和市役所職員

改めまして、よこはま地域福祉研究センター設立10周年おめでとうございます。この10年を振り返ったとき、その終盤には、新型コロナウイルスの感染拡大という世界的な出来事が待ち受けていました。これまで潜在化し、見えにくかった社会課題が浮き彫りになる一方、人とのふれあい、交流に大きな制限がかかり、「あいだの人」としては、とても困難な状況下での葛藤があったと思います。それでも、常に「今」と向き合い、実践によるつながりが幾重にも重なって、強く、広がっていったからこそ、10周年記念イベントを、あれだけ多彩で多様な人たちが一堂に、同じ感動をもって、お祝いできたのだと思います。

貴センターは、社会に起きている分断や不十分な社会制度への怒りを秘めつつ、地域の現場の2歩くらい先を見据えた研究の中で、「誰か

が言っていた課題」ではなく、生きにくさの本質を探り、セミナーなどを通じて、今必要なことは何か、ともに考えようと提示されています。そうしたセミナーで、突き抜けた明るさを持ち、簡単ではない状況に、エネルギーに立ち向かっている講師たちに出会い、あいまいな感情が言語化され、その言葉に励まされることが度々ありました。誰かの生きにくさに向き合うことは簡単なことではないから、決して甘やかしてくれない中間支援チームですが、「あいだの人」がつむぐ豊かな出会いと対話のなかで「人が信じられる」と思える瞬間を重ねながら、目の前の人の幸せを諦めず、もがいてくれる人が一人また一人と増えていくことを信じています。



伊藤 彰子さん 横浜市養沢地域ケアプラザ 地域交流コーディネーター

よこはま地域福祉研究センター10周年おめでとうございます。記念イベントでも、いつもと同様「対話」を重視したプログラムが企画され、短い時間でしたが、普段出会えない様々な方々と貴重なやりとりができました。

センター長の佐塚さんとは、私がケアプラザに着任し、お互いコーディネーターの立場であったときからの付き合いですから、既に15年。思い起こすと、常に取り組みのキーワードを頂いてきたと思っています。ここ数年間は、横浜市中区Co連絡会にアドバイザーとして関わって頂き、個性の異なるケアプラザ、コーディネーターの取り組みが、より一層、地域福祉推進に発展するよう、社協の職員さんも含め、みんなで対話し、アドバイスを頂いています。研修終了時に、なぜかいつも皆が前向き

になっているのは、私が15年かかわり続けている佐塚マジック!? 今年度、開催された「子ども・若者の育ちと自立を支えるセミナー2023」にも、楽しみに参加しました。ここでの学びは、感動さえしました。日本各地から「思い」を持って現場に挑んでいらっしやる講師が招かれており、参加者を「共有する仲間」として迎え、最後には「一緒にがんばりましょう!」と。取り組む地はバラバラ、大きなことはできなくとも、目の前にいる子どもたちがキラキラできる場所にしていけば、何かを変えていけると勇気をもらいました。すぐに解決できないことに取り組む続けるには、思いを共有できる仲間が必要です。そんな仲間に出会えるのが、よこはま地域福祉研究センターです。



原島 隆行さん 社会福祉法人若竹大樹会

法人設立10周年おめでとうございます。そんな節目となる年に理事を務めさせて頂き、皆様と共に祝い出来たこと嬉しく思っております。奇しくも私自身、同じ横浜でNPO法人を立ち上げる「1」年目というタイミングであったこともあり「10」年後の自分達の姿を想像しながら参加しておりました。

10年の活動の中には嬉しいことだけでなく、苦しい時期もあったことと思います。特に、最後の数年は「100年に一度」というレベルのウイルス感染により「密の回避」が謳われ、人と人との関わりや社会

全体のあり方がこの日を境に大きく変容しました。そんな困難にも向きあい「あいだの人になる」とのミッションの下、さまざまな人・活動・団体を繋ぎ、直向きに中間支援組織として活動をされてきた結果が「今」なのだと思います。

社会はアフターコロナに向け動き出していますが、より複雑で多様な社会の中において、今後一層「想いの共有」や「協働」が求められる社会、「あいだの人」が必要とされる社会がやってくることと思います。「10から20へ」これからのセンターの活動に期待しています。

休眠預金活用事業資金配分団体に採択されました！

困難を抱え孤立する子ども・若者の社会的自立支援事業

～地域との連携・協働による参加体験型プログラムの開発と推進～



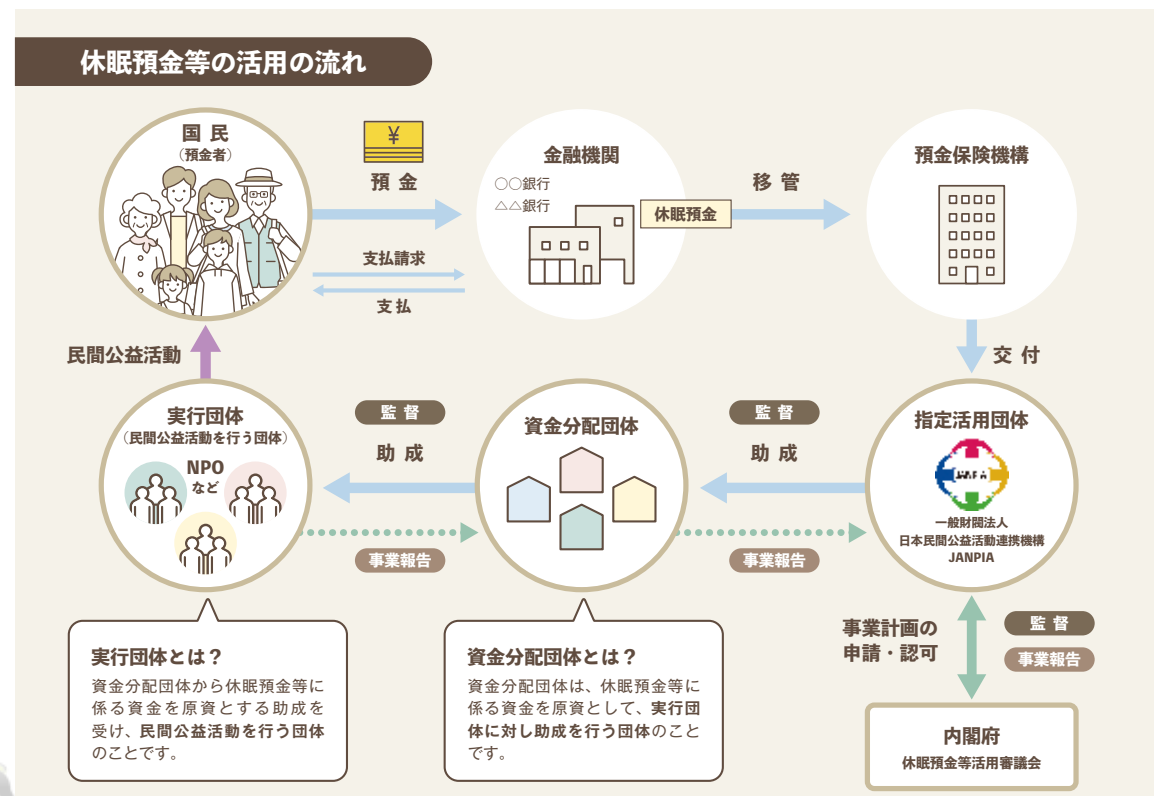
よこはま地域福祉研究センターは、2020年、神奈川子ども未来ファンド休眠預金活用事業として、「地域みんなが元気になる活動事例集 2021」を作成し、その成果がきっかけで、認定NPO法人神奈川子ども未来ファンドとのコンソーシアムにより、2022年度資金配分団体（通常枠）に採択されました。

休眠預金からの助成金総額5000万円を、公募により選ばれた5つの実行団体に3年間助成し、団体の活動に伴走支援し、その成果を社会的インパクトにつなげていきます。

これまで子どもプロジェクトで取り組んできたテーマ、「子ども・若者の育ちと自立」には、様々な人との出会い、多くの体験が欠かせません。3年間、実行団体の活動に伴走しつつ、若者の自立に向けた取組みとそこの子ども・若者や団体の変化、成長を可視化していきます。

一般財団法人日本民間公益活動連携機構（JANPIA）による休眠預金活用事業とは

「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」（休眠預金等活用法）に基づき、2009年1月1日以降の取引から10年以上、その後の取引のない預金等（休眠預金等）を社会課題の解決や民間公益活動の促進のために活用する制度が2019年度から始まりました。



子ども・若者の自立に向けての、地域との連携・協働による「参加体験型プログラム」とは？

- ▶ 子ども・若者の育ちと自立には、多様な人々との「出会い」と多様な「経験・体験」が欠かせません。また、家庭と学校、塾やサークルなど限られた人間関係の中だけでは多様な価値観を知る機会を得ることができません。
- ▶ 本事業は、不登校・ひきこもり、孤立して困難を抱える子ども・若者を対象に、地域と連携・協働による参加体験型プログラムを実施する実行団体を選び、それぞれの活動に神奈川子ども未来ファンドとよこはま地域福祉研究センターのスタッフがプログラムオフィサーとして3年間にわたり伴走支援し、その成果を可視化していく事業です。
- ▶ 特に私たちよこはま地域福祉研究センターは、これまでの「子ども・若者の育ちと自立」をテーマとした調査・研究、人材育成などの経験を活かし、参加体験型プログラムによる、子ども・若者個々の変化、それを取り巻く、家族や環境の変化とつながり、更には実行団体自身もどのように地域・社会とのネットワークが広がっていったのかを可視化し発信する役割を担っています。

公募により、9団体の中から（1団体は公募辞退）以下の5団体が実行団体として選ばれました。

団体名	事業名
1 特定非営利活動法人フェアスタートサポート（横浜市中区）	児童養護施設等の子ども達の為のキャリア教育事業
2 特定非営利活動法人横浜メンタルサービスネットワーク（横浜市港南区）	医療・福祉・教育の挟間で生きづらさを抱えた、小・中・高校生支援
3 一般社団法人かけはし（横浜市泉区）	不登校の子どもと生きづらさを抱える若者の社会的自立に向けた活動
4 特定非営利活動法人よこすかなかながや（横須賀市）	子どもに寄り添い、学習と職業体験にフォーカスした自立支援事業
5 一般社団法人多摩区ソーシャルデザインセンター（川崎市）	地域の若者が担う互助の支援により、不登校・引きこもりなどに対する居場所づくりと社会体験を行う事業

コンソーシアムを組む認定NPO法人神奈川子ども未来ファンドのみなさま



理事長 坂井 雅幸氏

よこはま地域福祉研究センターとのコンソーシアムが実現し、ともに取り組めることを大変嬉しく思います。苦勞もあるでしょうが力を合わせて乗り越え、事業の充実が図られますよう期待します。3年間よろしくお願いたします。

今回、JANPIA 事業でご一緒させていただきますが、双方の団体の強みを活かして実行団体を支援していくことで、3年後に向けて実行団体も我々も成長していければと思います。高みに向かって共に頑張りましょう。よろしくお願いいたします。

高宮 靖氏

初めてプログラムオフィサーの研修を受けました。今後、勉強しながら、実行団体の伴走支援に関わらせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

黒野 恵美氏

これまで調査研究に取り組んでこられた皆様の幅広い知見に、学ぶことはばかりです。現場の声を聞きながら実行団体のお役にたてるように、プログラムオフィサーとして共に伴走支援に取り組みます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

野北 康子氏

共に生きる社会づくりのための オンライン講座 PART 2

- 全8回 2022年10月20日～2023年3月4日
- ZOOM ミーティングを使っのオンライン講座
- 参加申し込み延べ人数…207人 ●参加者総数…144人



「ガチガチをゆるゆるに！ 弱さを大胆に！不安を可能性に！
今、目指そう、障害児者にとっての地域での自立生活」をメインテーマにして、今年度は“ライフステージに沿って”障害のある人の困難や課題を考え、家族や地域とつながって、共に育ち、共に学び、共に笑い合える社会づくりを講師・登壇者・参加者とみんなで語り合いました。



ライフステージに沿った 障害児者の自立生活を考える

今、社会が丸となって目指す！
障害児者の地域自立生活

講師 又村 あおい氏
全国手をつなぐ育成会連合会常務理事兼事務局長



キックオフ



乳幼児期



学齢期



成人期



クロージング ミーティング



悲嘆感情から障害受容と可能性を信じる心を育む

第2・3回 講師 福岡 寿氏 日本相談支援専門員協会顧問
ファシリテーター 天野 誠氏 NPO 法人びゅあ 理事長

- ② 中畝 治子氏 NPO 法人レスバイト萌 理事長
- 森山 淳子氏 NPO 法人ニコちゃんの会 代表理事
- ③ 森光 郁子さん 札幌市在住 障害者家族
- 宮本 真人氏 横浜市中部療育センター 学校支援担当

幸せのためにやりたいことを自由に

天野 誠氏 NPO 法人びゅあ理事長

障害児者支援においてライフステージに応じた支援の重要性が認知され始めてはいるものの、実際のところ多くの支援者が関わられるのは学童期や成人期等の限定的なものではないでしょうか。また、当事者だけでなくその家族への支援も必要とされていることから、一支援者の専門性をどこに持たせるのか悩んでいるかたも多いと思います。この講座では、講師のレクチャーに加え全国の好

事例から、ヒントや答えになるようなものがたくさん散りばめられ僕自身響くものがたくさんありました。支援者として何事も型にはめがちですが、人によって状況は様々で、支援方法に正解はない。だからこそ自由にやりたいことをやれば良い！ただ、ひとつルールを設けるなら「幸せのために僕たちができることは何か」を考えると、今回得た僕の思考法です。



周りを見渡せば共に学ぶ仲間や助け人がきつという

森光 郁子さん 札幌市在住 重症心身障害者家族

コロナ禍で福祉分野にもオンライン講座が開催されるようになり、今まで参加不可能と思っていた勉強会のハードルが一挙にさがり、とても嬉しかったです。親の介護で横浜から札幌に転居した私には、自宅で子ども（医療ケアがある重症心身障害者）の世話をしながら、多職種の専門家や実践者の話を伺えて、質問も直接可能だったからです。この講座の「ガチガチをゆるゆるに」らしく、頭を柔軟に各講座の学びを自分の考えに落とし込む良い機会にな

りました。今年度は私たち家族の子育ての歩みを話す機会をいただき、地域の仲間・専門家・先輩たちの助けや交流を経て、現在の生活があるのだと改めて感慨深く思います。今、子育てで不安いっぱいママやパパ、きつとあなたの側にも共に学ぶ仲間や助け人がいるはず。やがて心の財産となって、心穏やかに前向きになれる日が来ることをお伝えしたいです。



子どもの社会化のチャンスを逃さない

第4・5回 講師 増田 高氏 武庫川女子短期大学部准教授
ファシリテーター 有留 敦氏氏 中村特別支援学校教諭

- ④ 高島 聡子氏 横浜市青葉区在住 障害者家族
- 川越 則之氏 横浜市多機能型拠点郷 相談支援員
- ⑤ 成田 裕子氏 NPO 法人フュージョンコムかながわ理事長
- 大郷 和成氏 NPO 法人 laile'sa 副理事長



人生100年時代を生きる障害者と家族 対話×対話×対話

第8回 講師 又村 あおい氏
全国手をつなぐ育成会連合会常務理事兼事務局長

地域社会のなかで私を生きる

第6回 講師 朝日 雅也氏 埼玉県立大学教授
⑥ ファシリテーター 山崎 裕之氏 社会福祉法人横浜愛育会

- ⑥ 伊原 文恵氏 横浜市緑区在住障害者家族
- 安斉 悦子氏 NPO 法人なかよしの花
- 第7回 講師 綿 祐二氏 日本福祉大学教授
- ⑦ 天野 誠氏 NPO 法人びゅあ 理事長
- 東野 寛子氏 認定NPO 法人スローレーベル



2 社会福祉法人 素心会・横浜愛育会 コンサルテーション

二つの障害福祉事業を行う社会福祉法人のコンサルテーションを継続的に担っています。どちらの法人も、職員養成のプログラムの企画・実施をさせて頂いたことから発展した事業で、現在は、職員の主体性を柱とし、問題解決、また、組織の成長と発展のために対話を重ね、自ら方法を導き出し、行動につなげるプロセスを提案、伴走しています。

成り立ちも、地域特性も異なる2法人。当センターのネットワークを活用して、講師やアドバイザーの派遣やワークショップや体験プログラムの実施など、それぞれの法人職員のみなさんが、積極的に参加・対話を重ね、法人のチカラを高めています。

社会福祉法人 素心会

設立70年の歴史を持つ素心会。

入所施設からスタートした素心会は、現在、入所・デイセンター・地域支援センター・グループホームと4つの大きな事業を行っています。現在の素心会コンサルティングは、素心会を未来につなげていくための新理念の構築と地域社会との受発信を実現するホームページのリニューアルに取り組んでいます。理念構築プロジェクト&HPリニューアルプロジェクト、どちらのメンバーも、皆が知識と情報を高め、自分のスキルとして身につけつつ、プロジェクト活動に臨んでいます。

プロジェクトA 理念作り班



理念プロジェクトは、2023年9月新理念完成を目指して、多様な視点で客観的に法人の今を確認すると共に利用者・社会のニーズをキャッチしてより良い法人運営につなげようとしています。

左は、理念プロジェクトのメンバーの皆さんの話し合いの進捗を法人の全職員に伝える新聞。この新聞に関する感想や意見が、法人全職員からたくさん出されて、プロジェクトは更に元気になりました。上は、現法人の今を職員自身が掴むために4つの事業所のリーダーたちが行った分析ワーク。

プロジェクトB HPリニューアル班

- HPリニューアルプロジェクトの今年度は (株)イータウンの斎藤保氏より
- 第1回「伝えるHP制作の3つのツボ」
- 第2回「誰に×何を×どう伝えるのか?!」
- 第3回「企画書づくり～コンテンツを考える」を学びました。



佐塚と一緒に考えます

理事長も輪の中に

社会福祉法人 横浜愛育会

横浜市でも指折りの大規模商店街の中にある障害法人です。下町的なまち文化に法人は自然体で馴染み、利用者、職員がまちの中で、生活者として存在していることは、この法人の大きな強みであると私たちは感じています。

そんな愛育会が、より一層、地域とつながり、当事者の暮らしを豊かに、また、法人も地域に根差し、地域と共に成長する法人となるようコンサルティングのプログラムを考えています。『地域で実現する障害者のはたらく・くらすをエンパワ!』をテーマに全体職員研修、管理者研修を実施。回を重ねる毎に職員さんたちの笑顔と元気な会話が増え、個々と組織のエンパワメントの視点が地域へと広がっていく手ごたえを感じました。年度末には文化・芸術活動とスポーツという新しい分野に触れ、それらを活用した楽しい取り組みのアイデアがいくつも生まれていました。

全体職員研修

- ① 令和4年12月8日(木) 13:30～16:00 (オンライン)
「人の権利を守るってどういうこと？」
講師 武庫川女子大 准教授 増田 和高氏
- ② 令和5年3月2日(木) 13:30～16:00 (対面+オンライン)
「障害福祉サービスの危機管理を拓く」
講師 社会福祉法人恵和 恵和めぐみ課長 上條 健太郎氏



管理者研修

- ① 令和4年12月27日(火) 16:00～18:00
「どうする? 価値ある地域とのつながりづくり」
講師 全国手をつなぐ育成会連合会 事務局長 又村 あおい氏
- ② 令和5年4月1日(土) 10:00～16:00
AM 「文化・芸術活動でつながる障害者と地域」
認定特定非営利活動法人STスポット横浜
田中 真実氏・川村 美紗氏
- PM 「ポッチャを活用して地域をつなぐ」
一般社団法人ヨコハマ・インクルポッチャ・ラボ
代表理事 佐塚 文彦氏



この楽しさを伝えたい!

3 CANDY BOUQUET キャンディブーケ ～障害児者の保護者の交流の場～

今年度のキャンディブーケでは今まで繋がってきた色々な分野で活躍する方々にお声がけし

障害児者保護者×病児・者保護者×支援者×メーカー×障害・児者施設
様々な組み合わせでそれぞれの思いを伝える合う事を目的に、保護者同士が教えあうワークショップ、意見交換会、展示会、動画公開を行いました。

今回、4回のワークショップの感想で参加者から共通して興味関心が高かった「オムツ」。メーカーさんをお呼びしてユーザーの生の声を伝える新しい形での意見交換会が開催できました。

展示会ではキャンディブーケで作った作品や、ご家庭で生まれた障害児者や保護者の作品、ワークショップでの技術を活かした写真などを「家族のギャラリー」と題し展示し、家族の感じる幸せエピソードと共に、障害児者の生活の姿を発信する事が出来ました。

6月28日	ストレッチ&交流会
7月14日	きょうだい児支援活動の実際と交流会
9月20日	ゼンタングルアートワークショップ
10月11日	スマホフォトワークショップ
1月16日	オムツを語ろう
3月1日～12日	家族のギャラリー ガッツビーと西
3月13日～25日	家族のギャラリー 郷
3月31日	キャンディブーケ・家族のギャラリー動画公開



参加者感想

対面の企画嬉しかったです。顔をみて話すのが楽しいですね。
当事者保護者

企業の方と話す機会をいただけて、利用者の事を考えてくれている事を感じることが出来ました。
当事者保護者

リラックスしながら一つの事に集中して取り組む時間。リフレッシュできました。
当事者保護者

わかった気になっていたことも一緒にテーマについて語る事でリアルな困り感を感じる事が出来ました。
支援者

たくさんの学びがあり充実した時間でした。早速試してみたいです。
支援者

子ども・若者の育ちと自立を支えるセミナー 2023

1 育ちづらい？生きづらい？ 子ども・若者の声に耳を澄まそう



子ども・若者の「育ちづらさ」「生きづらさ」、自立を阻む困難の背景には、大人たちの暮らしの危機、価値観の危機、社会全体の混沌があり、私たち大人や地域が何に幸福を見出して生きるのか問い直すことが、今、求められています。昨年に続き4回シリーズで開催したこのセミナーでは、子どもや若者が希望を持って健やかに成長できるよう、SOSを受けとめ支える地域社会を目指して活動する講師の方々とともに、子ども・若者の現状を学び、グループワークによって地域力の可能性について知恵を出し合いました。コロナ後、久々の対面研修となり、毎回、時間を過ぎててもまだまだ話し足りないほど、参加者の間に活発なやりとりが生まれました。

- 全4回 1/18(水)・2/1(水)・2/23(木・祝)・3/9(木)
- 受講延数…78名 ●参加実数…49名

第1回

おせっかいおばちゃんの輪 広がって20年！ ～コロナ禍（ピンチ）もチャンスに！地域の子ども&家族と共に～

地域にいる貧困、不登校、虐待、外国籍、障害など、さまざまな困難を抱え孤立した家庭を、環境に左右されることなく、自分らしい人生を歩めるように…「おせっかいさん」で支える地域での取組の実際や、組織運営のキーを学び、志を共にする輪をひろげる方法を考えました。



栗林 知絵子氏
認定 NPO 法人豊島子ども
WAKUWAKU ネットワーク



参加者のコメント

- 「地域のことは地域で解決する！」「地域の仲間がいることが原動力」、は私たちの活動にもつながる素敵なメッセージになりました。（居場所活動者）
- まず自身のミッションとパッション、ぶれない信念と覚悟の強さが大事だと改めて感じました。人を動かす人間性、柔らかな言葉かけも大切ですね。（民生児童委員）

第2回

一泊500円「やどかりハウス」が街を変える！ ～奪われたチカラを取り戻すための「のきした」作り～

家庭の中の暴力や抑圧から逃れられる、安心して泊まれる宿や居場所作り。何も聞かずに受け入れ、徐々に関係性をつくる。支援者としてでなく隣人として「出会い直す」。「全員首脳」の場を共有しながら「奪われたチカラ」を取り戻す。「のきした作り」の紹介から、支え合う地域を創る意識を問い直す機会になりました。



元島 生氏
NPO 法人場作りネット



参加者のコメント

- 「出会い直し」によって、まちに開く、まちの中で受け止めていく視点を持つことの大切さ、事象の理解の仕方、言語化、深める場、を繰り返していくなかで、まちに関わる人を増やしていく様子が勉強になりました。（社協職員）

元島さんから一言

子育ての責任は親だけにあるのではなく、地域社会にもあります。しかし現代はその責任が親だけに課せられ、親も子どもも自分を責め、苦しい状態が家庭の中にあります。市民が自分たちの責任として、子ども若者のことを考えるということは、これからの社会に必須の機会だと思います。どうか続けていってください。僕も頑張ります。

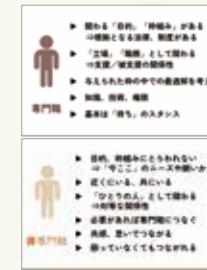
第3回

アウトリーチでSOSに応える！～ホームレス化する若者たち～

コロナ禍で拍車がかかった若者のホームレス化。多くの場合「ホーム」や「お金」がないだけでなく、家庭環境の断絶など人間関係に乏しく、自尊心を失い、助けを求められず諦めに陥りがちです。専門職と非専門職の役割やアプローチの理論を学び、孤立する若者に自己責任でなく社会がどう繋がって支えていくのか、可能性を探りました。



根本 真紀氏
ソーシャルワーカー



参加者のコメント

- 課題解決に踏み出すまでの「混沌」を支える、意欲を育むための「待つ時間」が言語化された。つながるまでに必要な時間があることを認識できた。専門職と非専門職の整理がとてもわかりやすかった。（自治体職員）

根本さんから一言

子ども・若者を含め、一人ひとりの「暮らし」を今一度見つめなおし、そこが窮屈になっている背景を考えると、一端に自分も加担していることに気づくかもしれません。社会が変わっていくには、まずは自分が変わっていくことから。セミナーの最終回で皆さんの行動宣言を聞き、私自身もまた明日から頑張ろうと思える時間になりました。

第4回

どうする？育つチカラ 生きるチカラを地域がエンパワー！ ～対話×対話×対話 みんなで話そう～

最終回は前回の講師、根本さんをアドバイザーお迎えし、メインはグループごとの対話。これまでの学びを踏まえ、子ども・若者のリアルニーズとは、自分たちが子ども・若者と関わっていく方法とポテンシャルについて語り合い、一人ひとりが三年後の目標を宣言しました。



佐塚 玲子



参加者のコメント

- 地域の方々がどんなニーズがあるのかわかることができ、学校としても何ができるかを考えさせられました。（教職員）
- 様々な立場の人の話を聴くことで、子ども若者への視点、関わり方の違いを知り、実際に活動している人と会って話を聞き、何が難しいか考えていましたが、「できることからやってみる」という気持ちになりました。（ケアプラザ職員）

参加者の声 /



鈴木 伸貴喜さん 施設ケアマネジャー

本研修を通して得られたもの、それはノウハウなどではなかった。講師陣や参加者さんの「自分のまちをよくしたい」「目の前のこの子のために」という圧倒的な熱量を浴び、たくさん対話をし、素敵な仲間ができたことに感謝します。そして、次は私も！とここで宣言します。



原田 敦子さん 民生委員

参加させていただいたセミナーには、子ども達や地域の方々の幸せを支えようとする力が溢れていました。今困っている人を助けるというより、寄り添うことが大切なのがよくわかりました。講師の方々の優しさに胸をうたれました。

2 令和4年度 横浜市ヤングケアラーに関するフォーラム企画運営業務 ヤングケアラーを地域で支えよう！

気づいていますか？
あなたの身近な若者による尊い Care
時に発せられる SOS を！

● 令和5年3月19日(日) 13時～16時30分
● 会場…神奈川県民ホール大会議室 ● 参加者…75名 (申込者105名)



近年、本来、大人が担うことが想定されている家事や家族の世話を日常的に行っている子ども・若者、いわゆる「ヤングケアラー」が社会問題となっています。よこはま地域福祉研究センターは、設立以来10年、「子ども・若者の育ちと自立」についての研究活動を継続的に行う中で、数年前より、多様な年代、多様なケアを担う立場にいる子ども・若者ケアラーに気づき・身近な地域で支える複数の市民活動団体とつながりを持っていました。一方、横浜市は、令和4年度11月「横浜市におけるヤング

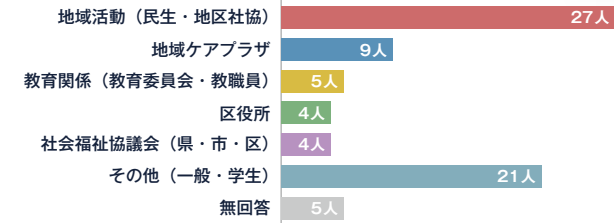
ケアラーに関する実態把握調査」を実施。更に、初のフォーラム開催をすることとし、よこはま地域福祉研究センターは、その企画・実施の委託を受けることとなりました。子ども・若者によるケアは、背景に家庭内のデリケートな状況があります。そのため潜在化しやすく市民も、教育・福祉・医療等の専門職も、その存在を知り・関わることも困難です。本フォーラムは、ヤングケアラーについての理解を深めることを第一に、講師・パネラーとの調整を重ね開催しました。

- 開会の挨拶
- 調査報告 『横浜市におけるヤングケアラーに関する実態把握調査結果について』
- 基調講演 『ヤングケアラーのリアルを知ろう！』～ SOS が出しにくいのは何故？～
講師：立命館大学 産業社会学部 教授 齋藤 真緒 氏
- パネルディスカッション
 - ・ 介護ジャーナリスト・ライター・漫画家 青山 ゆず子 氏
『ばーちゃんがゴリラになっちゃった』
 - ・ 横浜ヤングケアラーヘルプネット・認知症対応型デイ 介護支援専門員 西迫 愛氏
『ケアラーサポート実践の立場から』
 - ・ 日本福祉大学福祉経営学部教授・社会福祉法人睦月会 理事長 綿 祐二 氏
『ヤングケアラーの本質は何か？』
- コーディネーター よこはま地域福祉研究センター センター長 佐塚 玲子

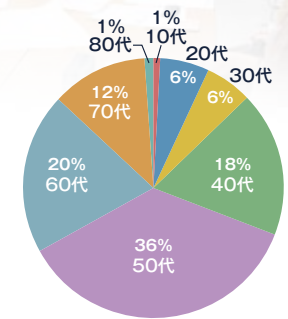


参加者

▶参加者所属



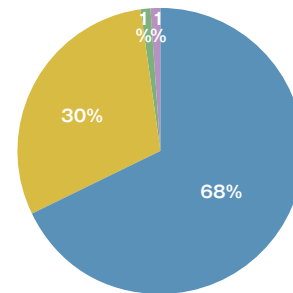
▶参加者年代



参加者アンケート

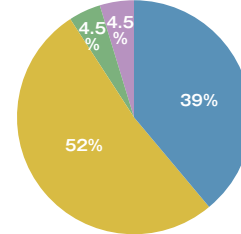
● …大変参考になった ● …参考になった ● …あまり参考にならなかった ● …その他/無回答

▶フォーラム全体

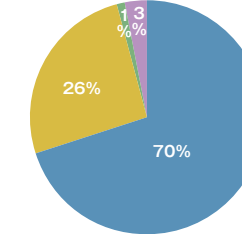


- 調査報告・基調講演・パネルディスカッション、すべてが自分にとって新しい視点でした。(就労支援機関職員)
- 自分のもっていたヤングケアラーについての認識を変えることができました。(ケアプラザ職員)
- これまでモヤモヤとしてわからなかったことをフォーラムに参加して整理できました。(自治体職員)
- 大変参考になったが、教育現場や地域でのヤングケアラーへの適格な支援方法を見出すことの困難さを痛感しました。(教育関係)
- ヤングケアラーの状況を知るだけでなく、今後、どのように支援していくのか考える機会になった。(社会福祉協議会職員)
- 「SOSが出せない」「かわいそうと思われたくない」など、地域で子ども支援活動している実感と共通することを聴くことができました。改めて身近な地域での支え合いの必要性を感じました。(民生委員)

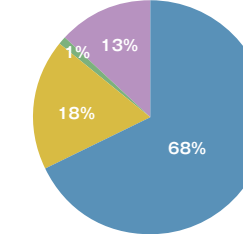
▶調査報告



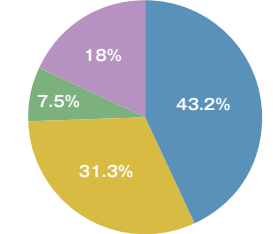
▶基調講演



▶パネルディスカッション



▶対話の時間



- 基調講演・パネラーの皆さまのコメント、多様な視点でのお話をたくさん聞くことができ、とてもためになった。参加するまで、想像もできていなかったことを知ることができた。自分の活動が、子どもケアラーにとってマイナスにならないよう、配慮していきたいと思った。(地域活動)
- 学校現場が知らないことが沢山あることを痛感しました。子どもを育てていくのは家庭や学校だけではなく地域で育てる。また、地域がやれること、やっていること様々あることを知りました。(教育関係)
- 様々な方々が参加しているフォーラムで、対話の時間、様々な話ができることが貴重な経験でした。(自治体職員)
- 齋藤先生の基調講演、綿先生のケアラー当事者会とお話、とてもためになり共感した。(民生委員)
- 教員として、ヤングケアラーを発見することだけでなく（発見も大事ですが）子どもが、自分らしく安心して育つ居場所を作ることが大切と感じました。学校でも啓発授業やりたいです。(教育関係)

企画・実施にあたり、多くの学びを得、ネットワークを広げることができました。また、開催当日は、多様な立場、年代の方々の参加があり、活気あるフォーラムになると共に、多くの感想も頂きました。ヤングケアラーを地域で支えるために、ヤングケアラーたちの「子ども・若者としての健やかな成長を守る」と同時に、「ケアラーとしての彼らを支える」2つの視点を共有できたこと

はヤングケアラーの理解を深めることと共に、フォーラムの成果だったと考えます。ヤングケアラーに気づくことも支えることも、特別な誰かだけで、実現するものではありません。更に、ヤングケアラーの理解、多様な支援が地域社会に広がり、発展していくことを願い、よこはま地域福祉研究センターも研究活動を継続していきます。



横浜市地域包括支援センター職員研修 業務委託

地域共生社会構想を目指して、個別支援と地域支援の連動によるソーシャルワーク力を高める！

暮らしに多様な課題が迫り、「生きづらさ」を抱える人々が増加する中、「地域共生社会の実現」を目指して地域包括ケアを推進することが地域包括支援センターには求められています。本研修では、地域包括支援センター職員のソーシャルワーク力を高めることを目的に、業務に必要な知識の理解や視点の獲得、複合的な課題のある対象者への支援、個別支援と地域支援の連動などを内容に盛り込んだ企画を提案し、実施いたしました。（委託元：横浜市健康福祉局地域支援課・高齢在宅支援課）



基礎編

対象：概ね経験年数1年未満で令和3年度横浜市地域包括支援センター職員研修基礎編を未受講の横浜市内地域包括支援センター職員

開催日：①5/30(月) ②6/13(月) ③6/27(月) ④7/13(水) ⑤8/10(水)

時間：13:30～17:00 **受講延数**：241名 **参加実数**：63名

プログラム

プレワーク（現状把握シート）の実施

第1回 横浜市地域ケアプラザと地域包括支援センターの意義と役割

「地域ケアプラザとは」講師：横浜市健康福祉局 地域支援課

「地域包括支援センターとは」講師：横浜市健康福祉局 高齢在宅支援課

「横浜市地域包括支援センターの実践」

実践報告者：横浜市内地域包括支援センター 3職種及び所長

コーディネーター：よこはま地域福祉研究センター センター長 佐塚 玲子

第2回 地域包括支援センターが推進する権利擁護（アドボカシー）の実践

講師：武庫川女子大学短期大学部心理・人間関係学科 准教授 増田 和高氏

第3回 高齢者の疾患の基礎知識／介護予防ケアマネジメントと介護予防の必要性

講師：東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム

東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター センター長 藤原 佳典氏

第4回 総合相談の役割と実践法（個別支援と地域支援の連動）

第5回 地域包括ケアの実践法（生活を包括的に支援する対人援助システム）

講師：（第4、5回共通）花園大学社会福祉学部社会福祉学科 教授 福富 昌城氏



応用編

対象：基礎編既受講者または、経験12ヶ月以上の横浜市内地域包括支援センター職員

開催日：①9/27(火) ②10/18(火) ③10/28(金) ④12/7(水) ⑤1/20(金)

時間：13:30～17:00 **受講延数**：75名 **参加実数**：32名

プログラム

プレワーク（現状把握シート）の実施

第1回 今、地域で実現するInclusion

講師：日本福祉大学 福祉経営学部医療・福祉マネジメント学科 教授 綿 祐二氏

第2回 困難事例に向き合う

講師：東京都立大学人文社会学部人間社会学科社会福祉学教室

人文科学研究科社会行動学専攻 社会福祉分野 教授 和気 純子氏

第3回 事例検討1 ・講義 事例検討とは

・提供 包括3職種より事例提供

第4回 事例検討2 ・全体事例検討会

アドバイザー：（第3回・4回共通）相模女子大学人間社会学部 准教授 松崎 吉之助氏

第5回 地域自立生活支援と地域共生社会の構築

講師：埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科

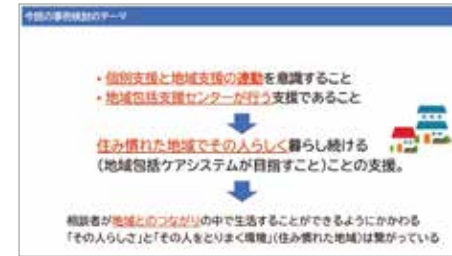
社会福祉学専攻大学院研究科 教授 朝日 雅也氏



事例検討テーマ

① 「個別」「地域」「組織」 3つのポイントを意識

② 「どうしてできたのか?」「どのように考えれば良いのか?」



第3回で提供された3事例について「事例について考えるためのシート」を使い、各自で考え、客観的に「個別」「地域」「組織」3つのポイントから分析した内容をアドバイザーに提出。その集計を元に第4回全体事例検討会で「どうしてできたのか?」「どのように考えれば良いのか?」について参加者全員で討議を行いました。

〈事例提供〉

- ① 「3つの孤独 地域からの孤立」 港南台地域 CP ママネ 野原 美弥氏
- ② 「キーパーソン不在の世帯への支援」 新山下地域 CP 社会福祉士 森 夏輝氏
- ③ 「レビー小体型認知症(姉)・アルツハイマー型認知症(妹) いつまでもご自宅でいきいきと暮らしたい」 さつきが丘地域 CP 保健師 芝田 郁子氏



横浜市社会福祉職階層別研修 実施に係る一部業務委託

横浜市では社会福祉職職員が専門職としての基盤となる知識・技術、専門能力を身につけるため階層別研修を実施していますが、その実施に関わる一部事務作業を本年度受託しました。

横浜市が初めて外部に委託を出したのもあったため、横浜市の担当者との連絡を取りあい、手探りで作業を進めていきました。守秘義務遵守はもちろん、業務をスムーズに

進める工夫や職員さんへの配慮などを行いながら、私どもも勉強させていただき、よこはま地域福祉研究センターらしい業務となりました。

2023年度は「横浜市専門職（社会福祉職保健師）階層別研修」として、職種・回数を増やした内容で、引き続き事務作業を受託しました。

横浜市里親養成研修の実施に係る委託

政府は2017年の「社会養育ビジョン」で2027年までに里親委託率を50%に引き上げるとの数値目標を打ち出しましたが、2020年度で22.1%となっています。子どもの虐待の件数は毎年増加しています。社会的養護を必要とする子どもたちに家庭と同様の養育環境が求められています。しかし、里親制度の理解はなかなか進まず、養育里親、特別養子

縁組を希望する家庭の増加が望まれています。

よこはま地域福祉研究センターは令和4年度、横浜市より委託を受けて里親養成研修を行いました。

里親基礎研修9回、里親登録前研修3回、里親更新研修2回、里親啓発講演会1回を実施。里親現任研修を企画し、オンライン（zoom ミーティング）で開催しました。

里親現任研修

子どもの想いを大切に、
子どもに寄り添う養育とは？
～中途養育の子育てで大切にしたいこと～

講師 大阪公立大学教授 伊藤 嘉余子氏

ご自身も実子と共に里子を養育し、イギリスの里親事情なども調査研究されている伊藤先生から、中途養育で課題となる愛着形成について、子どもの側の虐待体験、大人の側の権利擁護の認識を前提に里親制度のなかでの葛藤と、基本に立ち返って、子どものありのままを受け止め、自律を支援することを改めて確認する機会となりました。



- ・令和5年2月11日（土）
- ・参加申し込み…33件（申し込み人数44人）
- ・当日アクセス数…33件

コロナ禍を乗り越えて次のステップへ

3年を超える新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、全ての福祉事業所に対し、これまでにない試練を与えてきたと言えます。一人ひとりの利用者に寄り添いながらも、利用者のみならず、職員やその家族、そして自分自身にも同じように不安や心配を抱えながら、同時に解決しなければならない新しい課題も生じてきました。一方、見通しの立たない状況が続くからこそ、この困難を乗り越え、より良いサービス提供の実践を継続するために、各事業所が利用者の安全安心を確保しながら、様々な工夫をしてきた3年でもあったと思います。福祉事業所が、混沌とする社会情勢

の中で、地域に必要とされる存在となり、利用者は勿論、地域、関係機関と手を携えながら共に生きていく存在であってほしいと願います。

2022年度は神奈川県内事業所31件、東京都内事業所2件の評価を実施しました。

様々な分野の評価の実施を通じて改めて児童・障害・社会的養護関係施設など、これまでの分野別では解決できない、分野を越えた様々な困難な状況が現場にあることを再認識する1年となりました。

目的と成果

- ① 利用者の思いや考えを知る
- ② 職員同士が気付きを得て、今後の組織的な取り組みを知る
- ③ 一般職員と管理者層職員の認識の違いを知る
- ④ 次のステップへの課題を知る

全職員で取り組むからこそこの「成果」

施設の自己評価における職員同士、管理者層と一般職員の対話から「沢山の気づき」が生まれます。

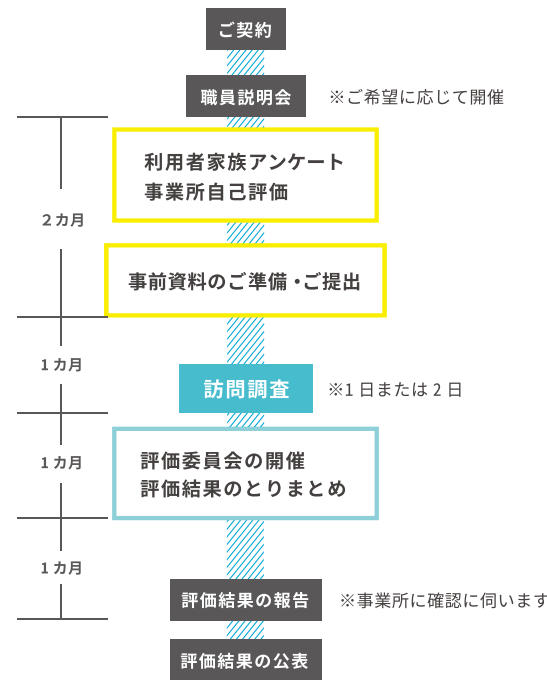
調査チームで最後まで議論を尽くすからこそこの「成果」

調査チームにおける、評価調査者及び事務局の対話から生まれる「充実した報告書」を作成します。

事務所の皆様と十分話し合いを重ねるからこそこの「成果」

評価開始から最終の報告まで、丁寧な対話から生まれる「安心と納得」をご提供します。

スケジュール



評価委員の声

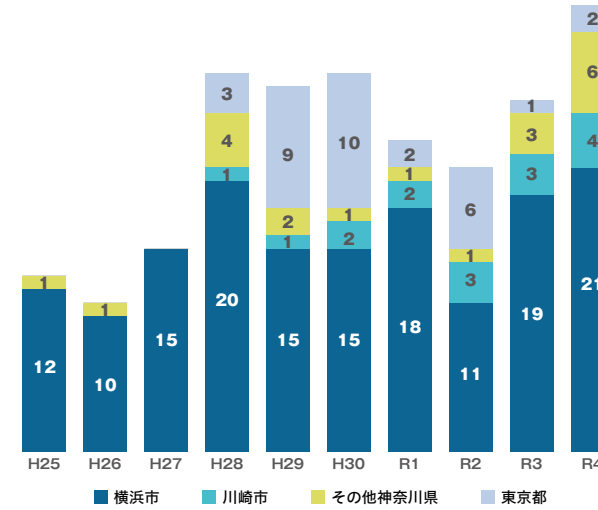
私は20年間、高齢者福祉の専門職として活動しておりますが、第三者評価の委員として参加させていただく度に自分の知識の不足を痛感しています。福祉といっても専門分野が多岐に渡っており、それぞれの分野での考え方や見え方があります。しかしどの分野でも一貫しているのが人権に関する考え方です。時代により人権の考え方は変遷しますが、現在では皆がより良く生きていくために皆で考え、実践していく風潮になってきていると感じています。

第三者評価でも「人権」という言葉が度々登場しますが、堅苦しいことではなく、一人ひとりが自由に自分らしく生きてられる考え方ということだと私は捉えています。第三者評価に参加することで自分の専門分野以外の知識や考え方の引き出しが増え、またその知識や考え方が自分の仕事にフィードバックされ問題解決に活かされていくと感じています。

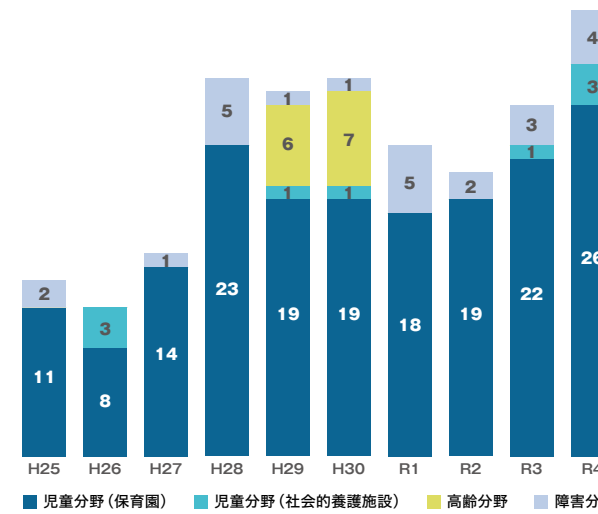
ご縁があり、評価委員会に参加することができたことに感謝しております。

〈M.Oさん〉

自治体別推移 (件)



分野別推移 (件)



指定管理者第三者評価

今年度は横浜市地域ケアプラザ1件の評価を実施しました。当センターでは、横浜市委託事業として「横浜市地域包括支援センター職員研修」を実施していることもあり、横浜市地域ケアプラザの現状を理解しつつ、所長をはじめとした職員の皆様との対話の中で、当該ケアプラザの強みや弱みを明らかにしつつ、次のステップに向けての改善点など、多くの気付きを得ていただくことができました。地域の人々の抱える生きづらさや課題の複雑化が顕在化するなか、共生社会の実現に向け、ケアプラザに期待されることも多くなっています。地域の福祉事業をけん引する指定管理者としての活動にエールを送りたいと思います。

2022年度実績

受審施設 (1件)
横浜市港南台
地域ケアプラザ

評価委員の声

保育士としての現場を離れて10年になり、評価委員会の仕事が終わるのか不安でしたが、本年度は30件近くの評価委員会に関わらせて頂き、保育所に勤めていた頃のことを思い出しつつ嬉しく思っています。

昨今は保育所のニーズも益々多様化し、役割も重大になり、驚きや戸惑いと共に勉強になることばかりです。加えて、通信機器の変化と普及が急速に進み、子育てにも変化をもたらす、コロナ禍で更にその必要性を痛感するところです。しかし、人が人を育てる上では、どんなに世の中が変化し便利になろうと変えられないものも多くあり、実際の保育の現場では変わらず行われていることが報告書から多く拝されます。そしてそれは大変ご苦労なことと察し、ありがたいことだと思っております。

未だに自信はございませんし、反省ばかりですが、私としてはその現場の方々に応援の気持ちを込めて何かお役に立てればと思いながら、評価委員会に参加させて頂いております。今後ともよろしくお願い致します。

〈S.Tさん〉

団体概要

役員

理事長	豊田 宗裕	聖徳大学心理福祉学部 教授
副理事長	佐塚 玲子	神奈川県社会福祉審議会委員 神奈川県地域福祉支援計画評価・推進等委員 相模女子大学人間社会学科 講師
理事	太田 貞司	長野大学社会学部 教授
理事	武田 千香恵	特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター 社会福祉士
理事	松崎 吉之助	相模女子大学・短期大学部 人間社会学部 准教授
理事	加留部 貴行	九州大学大学院 客員准教授
理事	鳴海 美和子	日本労働者協同組合連合会センター事業団
理事	及部 慶	社会福祉法人同愛会
理事	原島 隆行	社会福祉法人若竹大樹会
監事	吉田 三枝子	株式会社横浜中央経理 税理士

職員

佐塚 玲子 センター長・管理責任者	石上 美和 事務サポートスタッフ	山本 宣子 障害PJサポートスタッフ
武田 千香恵 第三者評価主担当・事務局	酒井 智子 子どもPJ・第三者評価サポートスタッフ	勝田 泰輔 ITサポートスタッフ
手塚 揚子 子どもPJ担当・社会教育JP担当・事務局	武川 理絵 経理・総務・障害PJサポートスタッフ	宮本 太郎 ITサポートスタッフ
柿沼 陽子 障害PJ主担当 第三者評価事務局	桜井 智代 障害PJ・社会教育PJサポートスタッフ	柏田 貴代 カメラマン
沼 佐代子 子どもPJ主担当・事務局		

経常収益	2022年度 決算	2023年度 予算
1. 受取会費	96,000	99,000
2. 受取寄附金	100,000	0
3. 受取助成金	3,412,410	4,440,000
4. 受託収益	10,112,520	10,285,000
5. 事業収益	18,663,150	19,600,000
6. その他収益	56,127	62
経常収益計	32,440,207	34,424,062

経常費用	2022年度 決算	2023年度 予算
1. 事業費	26,849,650	26,755,474
2. 管理費	5,037,076	4,866,684
経常費用計	31,886,726	31,622,158
税引前当期純利益額	553,481	2,801,904
法人税支払額	74,500	74,500
当期正味財産増減額	478,981	2,727,404
前期繰越正味財産額	5,205,701	5,684,682
次期繰越正味財産額	5,684,682	8,412,086

設立 10 周年を迎えることができました。
事業の一つ一つ、意義や価値を捉えて行っていくことは容易ではありません。しかし、職員を採用し、拠点を構え、多様なクライアントから信頼される仕事をするための組織の維持継続が容易ではないことを痛感しています。
10 年の間、2 か年ほどマイナス収支になったことがあるものの、私たちに精一杯、仕事を積み重ね、コロナショックも乗り越え、経営を続けられたことに安堵するとともに、仕事のチャンスを与えてくださった多機関の方々、同時に、私たちを見守り支えてくださっている理事・会員の皆さま、経営面でのサポートをしてくださる社会

保険労務士や税理士の方々にも、深く感謝しております。そして、人と地域のシアワセのために、「あいだの人」となるべく、各事業、懸命に仕事をやり遂げた現職員、そして退職した職員にも感謝し労いたいと思っています。
11 年目の第 12 期の予算は、設立以来初めて、4 月時点で、3,000 万円を超える仕事が決まっています。どの仕事も、組織を継続してきたからこそ、価値ある、やりがいのある仕事です。改めて、襟を正し、責任を持って向き合っていかなければと思っております。
どうか、今後ともご支援・ご協力頂きますようお願いいたします。

講師・アドバイザー

- 講師
 - ・小田原市民学校 (小田原市・小田原市社会福祉協議会)
 - ・地域福祉コーディネーター養成研修 (小田原市社会福祉協議会)
 - ・海老名市アクティブシニア養成研修 (海老名市・海老名市社会福祉協議会)
 - ・子ども若者支援のあり方研修 (参加型研究センター)
 - ・地域福祉保健計画推進研修 (横浜市港南区役所)
 - ・ケアプラザにおける障害福祉事業 (横浜市社会福祉協議会)
 - ・子どもの居場所づくり連絡会 (小田原市社会福祉協議会)
 - ・地域見守りネットワーク事業「みまもりネット」研修 (横浜市戸塚区)
 - ・大和市圏域ケア会議あり方検討 (上草柳・中央地域包括支援センター)
- アドバイザー
 - ・鶴見区生活支援コーディネーター研修 (鶴見区社会福祉協議会)
 - ・中区地域活動交流コーディネーター連絡会 (中区社会福祉協議会)
 - ・金沢区地域活動交流コーディネーター連絡会 (金沢区社会福祉協議会)
 - ・港南区地域活動交流コーディネーター連絡会 (港南区社会福祉協議会)

- 役員等
 - ・神奈川県社会福祉審議会委員
 - ・神奈川県地域福祉支援計画評価・推進等委員
 - ・「ヨコハマアートサイト 2023 年」選考委員
 - ・神奈川県障害者芸術文化活動支援センター協力委員
 - ・社福) YMCA 福祉会評議委員

一緒に福祉のこと
考えませんか？



会員募集のご案内

- ≫ 種類・年会費
 - 研究会員：個人…3,000 円／法人…10,000 円 (法人の目的に賛同し入会した個人及び団体)
 - 賛助会員：1 口…10,000 円以上 (法人の目的に賛同し事業を援助する個人及び団体)

- ≫ 会員になっていただいた皆さまには
 1. 総会へのご出席
前年度のアニュアルレポートをお送りします。
事業内容等ご覧いただきながら会員間での情報交換、新たな取組への意見交換の機会を設けます。
 2. 当センター主催講座への無料参加
各事業主催の自主勉強会・講座を予定しており、会員の皆さまへはご案内をお送りさせていただいております。どれも無料で参加していただく事ができます。

寄付のご案内

- 法人の取り組みに賛同し活動を応援して下さる皆さまから、個人、法人の区別なくご寄付を受け付けています。
 - 1 口…1,000 円 一口以上
- ご寄付いただいた皆さまには直前前年度のアニュアルレポートをお送りします。
お申し込みは当センターホームページより ▶ <https://yresearch-center.jp>